

様式 4

令和元年度 日立市教育研究会先進校等調査派遣研修報告書

日立市立泉丘中学校 教諭 宮本 忍

- 1 派遣期日 令和元年11月15日（金）
- 2 研修先 学校名（会場名） 福島県郡山市立郡山第二中学校
所在地 〒963-8013 福島県郡山市神明町5番10号
<http://www2.schoolweb.ne.jp/swas/index.php?id=0720057>

3 研修内容

（1）はじめに

共生社会の中で主体的に生きる力の育成を目指して
～児童生徒一人一人が生き生きと生活する力を育む授業づくり～

特別支援はインクルーシブ教育システムの理念や発達障害者支援法の改正をふまえ、障害のある方もない方も共に生きる社会を目指すとともに、すべての子供たちが希望をもって生涯を過ごすことができるよう支援体制の整備を求められている。生徒一人一人のニーズに応え、自ら主体的に学ぶ意欲や態度を養い、生きる力を育むことができるよう指導支援の充実を図る必要があると考える。

今回、東北特別支援教育研究大会福島大会の2日目の知的障害学級の公開授業と分科会に参加し、特別支援教育に関する実践や課題について情報交換が行われ、研修してきたことを以下にまとめた。

（2）視察校における授業の実践の実際

2・3年知的障害学級 生活単元 「収穫祭をしよう」

春からの栽培学習と関連させた学習活動を展開している。収穫したトウモロコシからポップコーンを調理し、お客様に提供する活動で他者の好みや気持ちを考えて相手が喜ぶことをしたり、自分達の思いを相手に伝えたりする授業であった。学習を通して将来の自立にむけてスキルを高められる単元であった。

① 生徒による本時の流れの説明。

図1の写真のように黒板に手書きのカードを貼りながら本時の流れを二人で説明した。教師が説明をするのではなく生徒が行うことで、本時に行うことを確認しあいしゴールを明確にすることができていた。

② 必要な情報をリサーチし、情報を整理する場の設定。

「各自が考え作ったポップコーンのプレゼンテーション」を行った。図2はパワーポイントを使って生徒が発表をしている様子である。ポップコーンのネーミングや味付けの理由、おすすめポイント等を表情豊かに説明し、能力に応じた発表をしていた。

③ 「収穫祭の屋台」他者と関わる活動。

図3は生徒がお客様の反応を見ながらやりとりをし、ポップコーンを選択しているところである。自分の考えた商品を選んでもらえるように積極的にアピールをしていてたくさんの人と関わろうとしていた。

④ 振り返りの時間の確保について

振り返りのワークシートの工夫もされていた。文章で表現することを苦手としているので、気持ちを文章ではなく顔の表情のイラストで表現し評価をしていた。生



【図1 流れの説明】



【図2 プレゼンテーション】



【図3 他者と関わる活動】

徒がこの時間の達成度を一目でみてわかるように工夫されていた。

(3) 分科会・他県の実践発表

分科会のテーマとして「主体的に学び、自立と社会参加の力を育てる授業づくりを目指して」というテーマで自立と社会参にむけた自己理解と他者理解を深める工夫について実践発表と協議が行われた。その中で、以下の発表があった。

- ① アセスメントによる実態把握についての報告では、個別の面談により自己理解から本人の悩み、願い、改善したいことの聞き取りと個々の生徒のレポート作りをした。また、保護者との面談を年度初めに実施し、教員が初対面の生徒でもスムーズに関われるようにしていた。

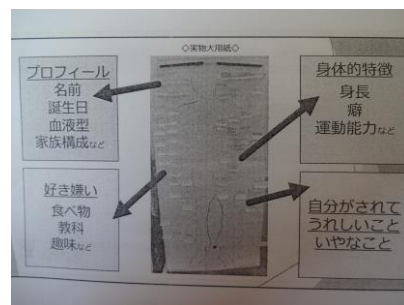
- ② 社会性やコミュニケーション面での課題解決に向けた授業では、順番や勝敗にこだわる生徒について、英語や社会の授業で勝敗のあるゲーム的な要素を取り入れた授業を実施した。楽しみながら負けても「次がんばろう」と前向きに取り組めるようなゲームを取り入れていた。また、SST や LSP（ライフスキルプログラム）による授業の実践をし、コミュニケーション能力の育成を繰り返し行っていた。校外学習や畑作業・調理実習のなどの体験活動では、他の人と協力しながら完成させていく楽しさを感じられるように工夫していた。また作物を育てる中で、観察記録をつけることで、写真を撮ったりレポートにまとめたりする力も身に付けさせていた。



【図4 観察記録】

- ③ 自己評価を上げるための実践では、帰りの学活で「頑張りの花を咲かせよう」という一人一人が今日がんばったことを発表し、他を賞賛し合う活動をしていた。この取り組みで今まで人に興味がなかった生徒が少しずつ他者を理解しようと前向きになっていることがわかった。また、毎月自分の生活を振り返る活動を大事にしていた。自己評価をし、担任からのアドバイスをもらい、積み重ねることで生活を振り返ることが習慣となり、自分の目標を意識して生活するようになっていた。継続することで、できた、やれた、改善できた、ということが自信につながるのだと感じた。

- ④ 自立活動の実践では自分を周囲に伝えやすくする1つのツールとして「自分取扱説明書」の作成をしていた。生徒が自分と関わる人に見せながら自分のことを伝えることで、周りの人に理解してもらいやすくなり、より過ごしやすく生きやすくなるのではと考え実践をしていた。自分の苦手なこと、できることできないことを確認し、相手に伝える場を設定することで、互いに理解を深められるように配慮していた。実際にロールプレイを行い、自分のできそうなことを探し、相手の要望に対して考えられるようにしていた。今まで自分の思いを伝えられずにパニックになっていた生徒が、なりかけそうな時に「取扱説明書」を確認しながら行動していた例も紹介していた。今後の活用の仕方には改良や検討を要するが、自分に合った方法で発信できるよう周りの理解を得ていくことも必要であると感じた。



【図5 自分取扱説明書】

4 感想

昨年度から特別支援学級を担当し、自立活動の授業をどう実践して行くか課題であった。今回、知的障害学級の授業参観と研究協議に参加させていただき、参考にしたいものがたくさんあり充実した研修となった。研究授業では、生徒中心で生き生きと活動する姿をみることができた。また、授業内容は栽培学習と関連させていて、単元の計画も綿密につくられていた。分科会の発表では、生徒の実態把握が重要であることを再認識した。今後は、実態などをふまえ研修したことを活用し、実践していきたい。また、特別支援コーディネータとして特別支援教育部の研修や校内研修等でも伝えていきたい。